『拾遺和歌集』「恋部」に於ける「～人」の考察

安 修 賢*

I. 序

1-1. 『拾遺集』の時代的背景

日本古典文学の「人」については、既に日記文学にて数多くの立派な研究がなされているが、三代集における特に、恋部に限っての「～人」研究は比較的調査研究が少ないと思われるので、この度、一応『拾遺集』における「恋部」の「～人」にクロズアップして進めたいと思われる。周知のごとく平安時代から室町時代にかけて、全部で二十一の勅撰和歌集が編纂され、その殆どは二十の巻によって構成されているが、恋歌にはそのうちの五巻がもちろん集によって若干の増減はあるが、当てられるのが標準的だったようである。決して恋に関する歌が雑然と配置されているわけではない。恋の始まりから終焉へ、という流れである。もう少し具体的に辿れば、恋心の萌芽、そしてそれを自分の胸底にのみ秘めて誰にも告げない段階から、思い余ってそれを相手に告げるものの容易には受け入れては貰えず、漸くにして念願通り逢瀬を果たす。しかし、間もなく相手の訪れは間遠になり、やがて訪れは完全に途絶えてしまう、大雑把に捉えれば、そんな展開の筋書きに基づいて歌が配列されているのであるが、さてこうした流れの中で、恋の喜びが一体どの程度表現されているのであろうか。結論を言ってしまうと、やや遠慮気味に言っても非常に寡少であるとせざるを得ない。すなわち、恋の手放しなまでの歓喜は和歌的抒情とはなり難い、という事である。『拾遺集』の手本は藤原定家によるものを中心にしての先ず、『拾遺集』における「恋部」の「～人」の券別分布状態から見てみると下のようである。

	戀一	戀二	戀三	戀四	戀五
歌番號	621～697	698～776	777～848	849～924	925～999
檢出回數(41)	9	8	7	8	9

* 慶南情報大学 日本語科 兼任専任講師. 한국해양대학교 국제대학 동아시아학과 시간강사

続いて、『拾遺集』の部立は、

巻数	巻一	巻二	巻三	巻四	巻五	巻六	巻七	巻八	巻九	巻一〇	巻十一	巻十二	巻十三	巻十四	巻十五	巻十六	巻十七	巻十八	巻十九	巻二十
部立	春	夏	秋	冬	賀	別	物名	雑上	雑下	神楽歌	戀一	戀二	戀三	戀四	戀五	雑春	雑秋	雑賀	雑戀	哀傷

のごとく、『古今集』の前例に従い、四季歌の後半をなしている。また、作者の分布は読人知らずの歌がもっとも多い全歌四十一首の中で二十七首を占めており、人麿(二)、貫之(二)、それから少将更衣・伊勢・一条摂政・源経本・右近・広平親王・敦忠・元輔・忠岑・好忠などが一首ずつ見られる。さて、『拾遺和歌集』についての概略は総巻数は二十巻、歌数は新編国歌大観によると1351首であり、勅宣は花山院(九六八～一〇〇八)の好尚による第三勅撰和歌集、『拾遺集』は勅撰集であるにもかかわらずその成立事情ははっきりしていないが、文中登場人物の官位より寛弘二(一〇〇五)年から同四(一〇〇七)年の間に成立したと見られるとする説が有力である。撰者はまた不明であるが、花山院親撰とするのがほぼ定説と言われる。他に藤原長能・源道済らが関与したとの説もある。主な歌人としては紀貫之・柿本人麿・大中臣能宣・清原元輔・平兼盛である。性格としては第三勅撰和歌集で、「三代集」の最後になっている。「拾遺和歌集」という書名は、古今・後撰両集に遺漏した歌を拾う、という意味を持たせものに違いないのは周知のことであろう。実際、この集においては、貫之・躬恒ら『古今集』の主要歌人の歌がさらに補われ、また『後撰集』の編者たちの歌が初めて大々的に採用されている。前二集にくらべ、目立った特色としては、貫之(104首)に次ぎ、人麿の歌が極めて多いことである。それらの大半は『万葉集』からでなく、平安朝に成立した『人麿集』から採られたものであり、実は歌聖に仮託した、奈良朝末期からの口誦古歌と思われる。したがって『拾遺集』における人麿評価は、奈良朝の万葉歌（特に巻十所収の読人不知歌）に和歌の理想の姿を見出した『古今集』の初志を、再確認しているとも言える。また、屏風歌など、晴の歌の多さでは、『古今集』を凌ぎ、『後撰集』と好対照をなす。また、恋歌に秀歌が多いことは定評がある。これは藤原定家も認めているところで、彼の『定家八代抄』でも恋歌が多く採られている。詞そのものへのすぎる執着や凝りすぎた趣向を見せる『古今集』の歌々に比べると、『拾遺集』の歌は詞も姿も穏やかな佇まいを見せているし、全体的に「平淡優美」な歌風とも称されていいだろう。親しみやすい反面、『古今集』の歌に見られた鋭敏な感覚性や調子の高さを欠く憾みがある。その背景として、宮廷生活の成熟と洗練があることは、既に多く指摘されているところである。ちなみに、巻十八「雑賀」の部に右大将実資「流俗のい

ろにはあらす梅花」、致方の朝臣「珍重すへき物とこそ見れ」以下、女「人心うしみついまはたのましよ」、良岑宗貞(「夢に見ゆやとねそすきにける」まで六首の連歌が収録されている。

1-2.『拾遺集』と藤原定家

伝本は藤原定家(一一六二～一二四一)の書写と校訂を経た定家本系とその他の異本系に二分される。いずれにせよ『拾遺集』は、『古今集』の正統を継ぎ、その歌風の円熟した境地を示す歌集であると言えよう。代表歌としては、「足引の山鳥の尾のしだり尾の長々し夜を独りかも寝ん（人麿）」、思ひかね妹がりゆけば冬の夜の川風寒み千鳥鳴くなり（貫之）」、「忍ぶれど色に出にけり我が恋は物や思ふと人の問ふまで（兼盛）」又、『定家八代抄」に漏れた名歌を取り上げてみると、「桜ちる木の下風はさむからで空にしられぬ雪ぞふりける（貫之）」、「ゆきやらで山路くらしつほととぎす今ひと声の聞かまほしさに（源公忠）」、「いづ方になきてゆくらむほととぎす淀のわたりのまだ夜ぶかきに（壬生忠見）」、「朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦着ぬ人ぞなき（藤原公任）」などがある。藤原定家は彼の人生を通して古典籍書写に力を注いだが、とりわけ『拾遺集』に関する書きまとめ作業も活発であったようである。これを年譜として「現存自筆本」と「現存転写本」とを調べてみると、

1162年（1歳）この歳定家誕生、

1202年（41歳）伊勢物語（建仁2年・6、書写本）、

1209年（48歳）古今和歌集（承元3年・6書写本、『諸雑記』）新古今和歌集（石田年譜）、

1214年（53歳）古今和歌集（建保2年秋書写本、山科毘沙門堂蔵古今集注奥書）、

1217年（56歳）古今和歌集（建保5年、書写本、『明月記』）、

1221年（60歳）後撰和歌集（承久3年・5、書写本、24日校了）伊勢物語（承久3年・6、書写本）、

1222年（61歳）古今和歌集（貞応元年・6、書写本、『諸雑記』）○古今和歌集（貞応元年6、書写本、桂宮本同集奥書）、拾遺和歌集（貞応元年・7、書写本）○後撰和歌集（貞応元年・7、書写本）、後撰和歌集（貞応元年・9、書写本）○古今和歌集（貞応元年・9、書写本）○古今和歌集（貞応元年・11、書写本）、

1223年（62歳）○古今和歌集（貞応2年・7、書写本、貞応本奥書、二条家伝来流布本）、後撰和歌集（貞応2年・9、書写本）、拾遺和歌集（貞応2年・9、書写本）、

1224年（63歳）源氏物語の書写始める（11月）、
1225年（64歳）源氏物語五十四帖書写完成（２月16日）、
1226年（65歳）〇古今和歌集（嘉禄2年・3、書写本）◎古今和歌集（嘉禄2年・4、書写本、嘉禄本奥書、冷泉家伝来本）、
1227年（66歳）伊勢物語（嘉禄3年・8、書写本）、
1229年（68歳）古今和歌集（安貞元年閏３月12日書写本、『明月記』）、後撰和歌集（寛喜元年・4、書写本）、長秋詠藻（寛喜元年・4、同集奥書）、
1230年（69歳）和漢朗詠集上巻（寛喜2年・3）、
1231年（70歳）拾遺和歌集（寛喜3年・9、書写本）、
1233年（72歳）千載和歌集（天福元年・7書写始め、８月５日終）、拾遺和歌集（天福元年８月中旬書写本、同集奥書）、
1234年（73歳）伊勢物語（天福２年正月20日書写本、天福本奥書）〇後撰和歌集（天福２年３月２日書写、14日校了、同集奥書）、後撰和歌集、行成本で校ず（４月６日）、
1235年（74歳）草子を書写（３月17日）◎土左日記（５月13日、前田家本奥書）、〇古今和歌集（嘉禎元年11月書写本）、
1236年（75歳）〇古今和歌集（嘉禎２年７月書写本、片桐洋一蔵本奥書）、後撰和歌集（嘉禎２年11月29日書写本）、
1237年（76歳）〇古今和歌集（嘉禎３年正月23日書写本、松平本奥書）、〇古今和歌集（嘉禎３年８月15日書写本、小出本奥書）、〇古今和歌集（嘉禎３年10月28日書写本、梅沢本奥書）、
1241年（80歳）８月20日死去、というふうな定家の執筆活動の流れであるが、『拾遺集』に対する関心は彼の晩年の頃からいったことが分かる。すなわち、1221年（六一歳）から1233年（七二歳）の間に三回にかけてのできことであったわけである。

II. 本

2-1 歌語「～人」の分類

歌の歌語分類において、取合えず、その範囲を用言が人に修飾する、また影響する用例を調査することにする。進んで、この用言も動詞と人との取合わせ関係を持つ歌をA歌群、形容詞と人との取合わせ関係を持つ歌をB歌群し大別して見てみることにしよう。

2-1-1 A歌群における「～人」

(1)「思ふ」

山口明穂は「思ふ」を述べるに際して、次の用例を見てみると、「人目多み目こそ忍ぶれ少なくも心の中に我が思はなくに」(万葉・十二・2911)、「心に思ふことを、見るもの、聞くものにつけて、言ひ出だせるなり」(古今・仮名序)、「心苦しきさまの御心地に、悩み給ひて、物心細げにおぼいたり」(源氏・葵)とあるように、心の動きを表す。現代語では、「頭で考え、心で思う」というように、「思う」は理性的な動きを表す「考える」と対比される、心情的な動きを表す語であるが、古語においては、「心」と区別する「頭」の動きという概念がなく、体の外部に表われない、内部の精神上の動きは心情・理性を区別する事なく、すべて「心」の動きである。しかし、実際に文学作品の中では、圧倒的に悪い状態のイメージとして使われた用例が多い。たとえば、「我が故に思ひな捜せてそ秋風の吹かむその月逢はむものゆゑ」(万葉・十五・3586)や「月出連れば、出でゐつつ嘆き思へり」竹取のかぐや姫の離別の予測への悲しい思いを述べた例などは、深い悲しみを述べるものであり、この文脈の例が目立つ。確かに「思ふ」が現実にない姿の心理的なイメージであることを考えると、目の前にない相手を心の中に描くことは、その人への深刻な心情であることが多くなることは当然ともいえよう。そして、そのことが、この「思ふ」という語が愛を寄せる相手への思いにつながり、恋に結び付く形で使われることになったという。1)

しのびて懸想し侍りける女のもとに遣はしける
音無の川とぞつゐに流ける言はで物思人の涙は
(読人不知・巻十二・恋二・750)

音無の川とんなって、とうとう流れてしまった。口に出すことなく恋の物想いをしている人の涙は。これは、忍ぶ思いで流れた涙を、音無の川によそえたのである。

我ながらさももどかしき心哉思はぬ人は何か恋しき
(読人不知・巻十二・恋二・759)

自分のものではあるが、かいのない恋患いをして、本当にじれったい心だ、私のことを思わない人をどうして恋しく思うのか。

我が思ふ人は草葉の露なれやかくれば袖のまづそほつらむ
(読人不知・巻十二・恋二・761)

1) 秋山 虔、『王朝語辞典』、東京大学出版会、2000、p 96

我が恋慕う人は草葉の露であるのか、思いを懸ければ、袖が真先に濡れてしまいそうだ。懸想の涙を草葉の露に見立ている。

蚊遣火を見侍て
蚊遣火は物思人の心かも夏の夜すがら下に燃ゆらん
(読人不知・巻十二・恋二・769)

蚊遣火は物思いをしている人の心を表すものなのか。人がしそかに思いこがれているように、夏の夜、一晩中くすぶり続けているようである。蚊遣火に下燃えと心中に秘めた思慕の情を重ね見る。

月影を我が身にかふる物ならば思はぬ人もあはれとや見む
(忠岑・巻十三・恋三・793)

月を我が身に換えられるものなら、無情なあの人もしみじみと心を寄せて見てくれるだろうか。古今集(602)に重出してある。

題知らず
思ます人しなければます鏡うつれる影と音をのみぞ泣く
(読人不知・巻十五・恋五・916)

語釈は、「思ます人しなければ」で、「増す」は、下の「ます鏡」と音韻的に響き合う。「増鏡」は影を意味する。すなわち、鏡に映った自分の姿。また、同拾遺集の四六九番歌「今日までと見るに涙のます鏡なれにし影を人に語るな」つまり、この鏡が私の持ち物であるのも今日までだ、と思ってみると、流れる涙の増すことです。鏡よ、貧しいこの身を人に知られるのは恥ずかしいから、これまで映し慣れてきた姿を、人に語ることがないようにという歌である。この歌の詞書は「大江為基がもとに売りにまうで来たりける鏡の包みたりける紙に書きつけて侍ける」となっている。貧しくて鏡を売りに出した女性が、鏡の包み紙に書き付けた歌の意である。結局、ます鏡は真澄鏡のことを指している。澄みきった鏡。「涙を流す」と言い掛ける。また、この用例は『後撰集』(恋四)の「影にだに見えもやすると頼みつるかひなく恋をます鏡かな」がある。この他に、『今昔物語集』(二十四)、『古本説話集』(上)、『宝物集』(二)、『十訓抄』(十)、『古今著聞集』(五)、『沙石集』(五)などに、発心譚として伝えられる。音をのみぞ泣く は声を張り上げて泣くのである。現代語訳は人に対して愛情を増す人はいないので、鏡に映る我が影と共に、声を立てて泣くばかりです。鏡に映った我が身を連れにして泣く。『八集集抄』に「人は来で、独り嘆き居るさま也」とある。

題知らず
我がごとく物思人はいにしへも今行末もあらじとぞ思
（読人不知・巻十五・恋五・965）

「いにしへも今行末も」で、過去もこれから将来も、つまり自分の物思いは類例がないものとする。『長能集』に「いにしへも今もあらんや我が如く思ひ尽きせぬ別れする人」が見える。歌の全意は私のように物思いをする人は、従来も今後もあるまいと思いますとのことである。

題知らず
我許我を思はむ人も哉さてもやうきと世を心みん
（読人不知・巻十五・恋五・995）

「世を心みん」特に、「世」は世間並のことではなく、男女の仲と解せる。私ほどに、私のことを思ってくれる人がいればよいのに、それでも尚つらく思われるか、世の中を試してみたいので。意思の疎通による愛情の深まりを期待する。この歌は『古今集』（恋五）の凡河内躬恒の歌に重出。一方、「八代抄」に「人の相思はぬ故に、世をも惱じて読める歌也」とある。

廉義公家の障子の絵に、撫子生ひたる家の心細げなるを
思知る人に見せばや夜もすがら我がとこ夏にをきゐたる露
（清原元輔[2]・巻十三・恋三・820）

「撫子」は秋の七草の一つで、今の「カワラナデシコ」のこと。異名が「とこなつ（常夏）」であった。「生ひ＋たる」は、生ひ　+たる（「たり」一完了・存続）連体形、「生ふ」（上二）連用形　：　はえる。生育する。生長する。「心細し」は①心細い②物寂しい、しみじみと寂しい感じがする。「げ」はそのようなようすである、またはたから見てそのような感じを受ける、の意を添えて、ナリ活用の形容動詞の語幹として用いられる。「思知る人」は情趣を解する人。有情の人。「ばや」は話し手、思う人自身の～したいな～でありたいな、という願望　を表わす。「すがら」（副）：（多く、夜についていう）その時間がすっかり過ぎ去るまでの意。とこ夏［常夏］は撫子。共寝をする「床」の意を掛けて用いられている。「をきゐたる」は「置く」に「起く」を掛ける。「露」：①（草の葉などに置く）つゆ　②涙にたとえていう語　③命が短くてはかないことにたとえていう語である。詞書には藤原頼忠の障子絵歌。藤原頼忠の家の襖の絵に、撫子がはえている家のものさびしさを詠った歌。情趣

2）清原元輔：延喜8年（908）生。永祚2年（990）6月没。83歳。深養父の孫。子に清少納言。三十六歌仙の一人。家集に「元輔集」を残す。

KOREA MARITIME UNIVERSITY 1945

を解する人に見せたいものだ。一晩中、我が家の常夏に置いている露を。情趣を解する人に見せたいものだ。一晩中、起きていて、私の寝床を涙で、濡らしているものを。撫子の露に寄せて、思慕の涙を詠む。思知る人は情趣を解する人(愛する人)として見ている。

題知らず
港入りの葦分け小舟さはり多み我が思ふ人に逢はぬ頃哉
(人麿・巻十三・恋四・853)

「港入りの」は港に入るの意である。「港」は、河口に設けられた船置き場。葦分け小舟 ： 葦の生い茂っている水辺を分けて行く小舟。障害が多くて思う人に逢えないたとえとして用いられる。二句までは「さはり多み」の序詞。さはり ： 障り。ここは、恋愛の邪魔になるもの。多み ： 多いので 、 み ： 形容詞の語幹に付いて原因・理由を表す。港に入る葦の間を分けて漕ぎ進む小舟のように、妨げとなるものが多いので、私の思慕する人に逢えない、この頃だ。(岩)港に入ろうと葦を押し分けて進む小舟のように、邪魔が多くて、私が思うあの人になかなか逢えないこの頃であるよ。(角)恋道の妨げとなるものを嘆いたものである。

(2)「来」

空間的・時間的また心理的にこちらへ近づくの意である。『徒然草』(一五五)に「春暮れてのち夏になり、夏果てて秋の来るにはあらず」春が終わってその後に夏になり、夏が終わって秋が来るのではないというのは、春はすでに夏の気配を孕み、夏もまた秋の気配を含んでいるとの例を示している。又、話し手が、自分を向うにおいた気持ちでそちらへ行くという逆方向性がある。例えば、万葉の「吾が思へる心和ぐやと早く来て見むと思ひて大舟を漕ぎ吾が行けば」(十五・3627・長歌)家島という名前の島に着いたら、私が家を恋しく思っている心も慰むかと思い早く行って見ようと思って、大舟を漕いでいくとの意である。

なき名のみたつたの山の青つゞら又くる人も見えぬ所に
(読人不知・巻十二・恋二・699)

あられもないうわさばかりが立つことであるよ、龍田の山の青つづらを繰るいうが、それと言って、人がたずねて来るような所でもないのに。つまり、たずねる人もない自分なのに、うわさが立つと憤慨するの意である。

来ぬ人をまつちの山の郭公同じ心に音こそ泣かるれ
（読人不知・巻十三・恋三・820）

「来ぬ人は「まつ」と、枕詞的に言い掛けている。「まつちの山」は待乳山、真土山。大和の国(奈良県)と紀伊の国(和歌山県)との国境にある山。「待つ」を導く序詞や掛詞として用いられる。郭公 ： 時鳥。暦の上の盛夏(五月)の到来を知らせる鳥として和歌に詠まれる。「主さだまらぬ恋」を助長させたりする。同じ心は「来ぬ人を待つ」心、時鳥が待っている人。「こそ」 ： 文末に対して強い拘束力を及ぼして、いわゆる係り結びとなる場合。来ぬ人を待つという名を持った、待乳山の時鳥よ、私もお前と同じ気持ちで、声を立てて泣けてしまうよ。来ぬ人を待つという待乳山の時鳥に共感させてその効果を極大化している。

三百六十首の中に
我が背子が来まさぬ宵の秋風は来ぬ人よりもうらめしき哉
（会禰好忠[3]・巻十三・恋三・833）

三百六十首は 『好忠集』の一部で、一年三百六十日を四季・十二月・三旬に分けて、一日一首ずつ日記的な形に詠んだ連作。毎月集と呼ぶ。我が背子は自分の夫。「背子」は男性を親しんでいう語。多くは、女性が夫や恋人などを親しんでいう。「秋風」は秋に吹く風。一人寝の夜は、わびしさや寂しさを一段と感じさせる。うらめし ［恨めし・怨めし］： うらめしい。うらみに思われる。私の夫が来てくださらない夜の秋風は、ひとしおお肌寒く身に沁みて物寂しく思わせ、訪ねて来ない人よりもかえって恨めしく感じられるものだ。一人寝の恨みを、秋風に向ける情趣を喚起している。

題知らず
うかりける節をば捨てて白糸の今くる人と思なさなん
（紀貫之・巻十四・恋四・899）

語釈に、うかりける節 は 不快・不満に思うこと。「節」は糸のコブになった部分の意を掛け、「白糸」の縁語。白糸の「繰る」に掛けて、「来る」を導く枕詞。現代語訳は白糸を繰るというが、不快な思い出は忘れて、今初めて来る人と思ってほしい。白糸に寄せて、過去のいざごとを忘れ、愛情の再出発を求める。

---

3) 会禰好忠： 通称は、丹後掾であったことから、会丹・会丹後。生没年未詳。延長元年(923)から長保5年(1003)頃か。家系・経歴不明。中古三十六歌仙の一人。家集に「会丹集(好忠集)」。

(3)「見る」

「見る」の「み」は、「め」や「ま」(目)に関係する、それらの交替する形であると考えられているものの、それ以上のことはわかりくいと藤井貞和は指摘している。視覚にかかわる行為を広くいうとともに、「心みる」(試みる)「返りみる」(顧みる)「うしろみる」のような比喩的な言い回しにも広がる。むろん比喩的な言い回しは原意味が生きているところにこそ比喩の生命があるのである。一方、動作の方向性によって「見ゆ」はこちらが見られることも、向うが見られることをも意味している。自然と人間、人間と人間との基本的な平衡関係を成り立たせうるのである。『万葉集』に「・・・見ゆ」とおさめる和歌が多いことはその平衡関係にも嫁ぐか、平衡関係を創り出しているかであろう。『古今集』になると、「・・・見ゆ」がなくなる。一首あるのは「さ夜中と夜はふけぬらし雁が音のきこゆる空に月渡る見ゆ」(秋上・192)は万葉歌の紛れ入ったものだけである。古今の傾向は「・・とぞ見る」「見ゆらむ」「見えつつ」「見えけむ」「見えなむ」「見えけれ」などであって、見ること、見られることの観察が細やかになる。「見る」が夫婦関係、結婚関係を表現することについては、万葉以来、その事例が多い。「あふ」を一緒に考えてみると、「見る」も「あふ」もごとく一般に対面するの意味で、「あふ」の場合はさらに何かと何かを合わせるという意味を持つものである。露骨には言い表わしえない情交ということを、範囲を定めぬ曖昧な感じにして、代替語として「見る」「あふ」などといったのだと氏は見ている。「見る」が情交関係をおぼめかしていう語になったのは、めったに顔を合わせぬ、顔を合わせる時はそれなりに特殊な場合である、との了解が前提にあっての意味拡大である。4)

見ぬ人の恋しきやなぞおぼつかな誰とか知らむ夢に見ゆとも
(読人不知・巻十一・恋一・629)

逢い見たこともない人が恋しく思われるのは、どうしたことか。気がかりなことだ。いったい誰と分かろうか。たとえ夢に見えようとも。

大井河下す筏の水馴棹見なれぬ人も恋しかりけり
(読人不知・巻十一・恋一・639)

大井河を流れ下らせる筏を操る水に馴染んだ棹ではないが、まだあまり見馴れていない人でも恋しく思われることだった。

我こそや見ぬ人恋ふる病すれあふ日ならでは止む薬なし
(読人不知・巻十一・恋一・665)

4) 秋山 虔、前の本、p 425

全く私こそが、逢い見たこともない人を恋する病をすることだ。逢う日という名を持つ、薬でなければ、この恋の病を直す薬はない。

(4)「知る」

白藤礼幸[5]によれば、「知る」の場合は、その「知る」内容がきわめて広く、多義となる。「月夜にはそれとも見えず梅の花香をたづねてぞ知るべかりける」(古今・春上・凡河内躬恒・40)は、それと対象を認識することであり、「鶯の谷より出づる声なくは春くることを誰か知らまし」(同・春上・大江千里・14)はそのことを認知する意である。「知る」は、いつ、誰、何、どこ、なぜ、いずれ、いかにして、すなわち手段・方法などの、今まで持っていなかった知識をそのとき初めて持つことであるが、それがどういうもの・ことであるか、という点からは、「わがまだ知らぬしののめの道」(源氏・夕顔)など、経験する意となり、その人がどういう人であるかを知る過程は、「あひ知りて侍りける人のあづまの方へまかりけるを」(古今・離別・清原深養父・378詞書)の、交際する意となり、さらに「知る人もなくて漂はむことの」(源氏・栢木)の妻・愛人として面倒をみるの意となる。ここで「知る」の表れ方で注意すべきは、その表現傾向上のそれぞれの活用形である。というのは、『古今集』の場合、その全用例の過半数は未然形であり、その未然形の九割近くが打ち消しの語を伴ったものである。「三輪山をしかも隠すか春霞人に知られぬ花や咲くらむ」(古今・春下・貫之・94)。又、恋の部についてみると、連用形三例のうち二例は「夢と知りせば」(古今・恋二・小野小町・552)と仮定のもの、また終止形九例中、六例は「知るらめや」と反語表現、連体形五例中、三例には下に「無き」の語を伴っている。

色ならば移る許も染めてまし思心を知る人のなさ
(紀貫之・巻十一・恋一・623)

私の恋の思いが、もし色であったなら、深く染み込むほどまでも、濃く染めて見せるのに。が、色だけではないから、それほど思い詰めている私の心を分かってくれる人は誰一人としていないことだの意である。

(5)「合はす」

本来は二つまたはその以上のものを一つになるようにする意である。『枕草子』の「いとうるはしう袖をあはせて」(なほめでたきこと)のように臨時の祭りの舞人がとてもきちんと両袖を重ね合わせての光景である。又、「あはす」は夫婦にする、結婚させるの意があって

5) 秋山 虔、前の本、p 215

「親の合わすれども」『伊勢物語』(二十三)の用例が見える。一方、夢合わせをする、夢の吉凶を判断する意味もある。『源氏物語』(若菜)の「おどろおどろしう様異なる夢を見給ひて、あはする者召して問はせ給へば」つまり、ただ事ではない異様な夢をご覧になって、夢の吉凶を判断する者を呼んでお尋ねになるとの用例がそれである。

夢よりぞ恋しき人を見初めつる今はあはする人もあらなん
(読人不知・巻十一・恋一・630)

ようやく夢によって、かねがねうわさんみ聞いて恋しく思っていた人を見初めてしまった。今度は、夢合わせではないが、逢わせてくれる人もいてほしいものである。

(6)「よそ(寄・比)ふ」

他のものに引き寄せて比べる、なぞらえる、例えるの意である。「古今仮名序」に「富士の煙によそへて人を恋ひ」があり、関連があるとする意もある。結び付けるとのである。『古今集』の「思ふどち一人ひとりが恋ひ死なば誰によそへて藤衣着む」(恋三・654)のように、忍んで思い合う同士でどちらか一人が恋焦がれて死んだら、誰の死にかこつけて喪服を着ようかの用例もある。

堤の中納言の御息所を見て遣はしける
あな恋しはつかに人をみづの泡の消えかへるとも知らせてし哉
(権中納言敦忠・巻十一・恋一・636)

返し

長からじと思心は水の泡によそふる人の頼まれぬ哉
(巻十一・恋一・637)

末永く添い遂げまいと思っている、あなたの本心は見通してしまった。愛情を水の泡によそえるような人はとても信頼できない。

(7)「とふ」

「問ふ」は山口明穂によると、不明な点を相手に明らかにしてもらうために言葉をかける意味の語であると述べている。たとえば、

「勅なればいともかしこし鶯の宿はと問はばいかが答へむ」(拾遺集・雑下・紀貫之女・五三一)が本来の用例である。さらに相手の事情を聞く「訪問する」「見舞う」さどの意味で使う場合も出る。「さねさし相模の小野に燃ゆる火の火中に立ちて問ひし君かも」(古事記・景行)には、かつての優しさに感謝する思いがあるし、「かう訪はせたま

へるかしこまりは、この世ならでも聞こえさせむ」(源氏・若紫)もまた、問いかけられた側には有り難い行為となるのである。言葉をかける行為は、その相手との間につながりを求める行為ともいえるが、「言ふ」「語る」「問ふ」と使われた場合、した側、された側、それぞれにとって意味の違う行為であると指摘する。[6)]

今更にとふべき人も思ほえず八重葎して門させりてへ
(読人不知・巻十二・恋二・775)

今になって訪ねてくるような人も、思い浮かばない。葎が一面に生い茂って、門を閉ざしてしまっているとあの人に伝えてくれよ。思い切ったはずの恋人がたまたま訪問したのを恨む歌である。

(8)「待つ」

岩下武彦は多くの恋歌では、「行く」「来る」のが男、それを「待つ」のが女、という関係を構成している[7)]。『古今集』の「来めやとは思ふものから蜩の鳴く夕暮れは立ち待たれつつ」(恋五・772)も、来ないだろうと一方では諦めつつも、また一方では蜩の声に促されるように落ち着いてはいられぬ女の心を詠んでいる。また、『古今六帖』五には、「人を待つ」の題で一九首もの大量の歌群が収められている。やがて「待つ恋」などの題が、題詠における主要なテーマになっていく。『新勅撰集』に載る藤原定家の歌、「来ぬ人をまつほの浦の夕なぎに焼くや藻塩の身もこがれつつ」(恋三・851)が「待つ恋」の典型的な歌である。藻塩を焼く煙が上空に立ち上っては消えていく松帆の浦の光景は、ひたすら男の来訪を期待せずにはいられぬ女の、恋に燃え上がる心象風景になっている。同じく定家の「風あらき本あらの小萩袖に見てふけゆく月におもる白雪」(六百番歌合・待恋)は、『正徹物語』に「ふつと我が身を題の心になして詠みたれば、待つと言はねども、待つ心聞こえたり」と説かれているように、歌の表現に「待つ恋」は、和歌の伝統的な発想になっていた。これら定家の二首は、いかにも題詠に相応しい男の詠む女歌であるが、次の歌は女性の作である。「待つ宵にふけゆく鐘の声聞けばあかぬ別れの鳥はものかな」(新古今・小侍従・1191)「待つ宵」と「あかぬ(朝)別れ」「鐘の声」と「鳥(の声)」を対照させながら、待つ女の身の切なさを詠んだ歌である。王朝期の和歌の表現では、「待つ」を「松虫」や「松」との掛詞仕立にすることも多い。

思ひきや我が待つ人はよそながらたなばたつめの逢ふを見むとは
(読人不知・巻十二・恋二・771)

---

6) 秋山 虔、前の本、p 116
7) 秋山 虔、前の本、p 401

まさかこのようなことになるとは思わなかった、私の待つ人は隔たったままで逢う機会もなく、織女星が牽牛星と逢うのをよそ事として羨ましく見ることになつとは。織女星でさえ一年に一回の逢瀬が叶うのに、自分はそれにも及ばないと悲嘆する。

(9)「忘る」

万葉から平安和歌への「忘る」には二つの変化があると鈴木宏子は指摘する。第一は、忘れられたことを悲しむ歌が現われることである。「忘らるる身をうぢ橋のなかたへて人も通はぬ年ぞ経にける」(古今・恋五・825)は、恋人に顧みられなくなった孤独な自分を「忘らるる身」という言葉で捉える。これを要するに、棄てられた者の心を詠ずる歌は、「忘らるる身をば思はず誓ひてし人の命の惜しくもあるかな」(拾遺集・恋四・右近・870、大和・84段)など多く、王朝恋歌、特に女歌の一つの型となる。第二は、万葉歌に見られた類句が、『拾遺集』の頃を境に姿を消し、代わって「忘らるる身」「忘れじ」「忘れなむ」などの歌ことばが一首の要となることである。「忘れなむと思ふ心のつくからにありしよりけにまづぞ恋しき」(古今・恋一・718)は、忘れようと決心するそばから恋しさが募る葛藤を歌うのである。また、「忘れじの行く末まではかたければけふをかぎりの命ともがな」(新古今・恋三・儀同三司母・1149)は、男の愛の誓いを「忘れじ」という一言に凝縮して捉え、その言葉が移ろう前の今日の日に生命を燃焼させせようとする歌である。初句に「忘れじ」を捉え、恋の誓いへの懐疑を詠む歌も、恋歌の型の一つである。[8)]

中将の御息所のもとに萩につけて遣はしける
秋萩の下葉を見ずは忘らるゝ人の心をいかで知らまし
(広平親王[9)]・巻十三・恋三・833)

中将の御息所は村上天皇更衣、藤原脩子。歌詞の「人」を指している。秋萩の下葉とは秋早く黄色に色付く。下葉は心中を示し、変色によって、変心を表象する。見ずは：見(見る・上一・未然形) + ず(打消 ・連用形) + は(仮定を表わす接続語をつくる。…ならば)忘らるゝ ： 忘ら(忘る・四・未然形)+ るゝ(る・受身・連体形)を表わしている。いかでの場合は①疑問、どういうわけで、どうやって、②反語、どうして、なんで、③願望。どうにかして、ぜひ、「まし」は反実仮想・意志・希望・推量などを指している。すなわち、この歌の詞書から中将の御息所のところに萩をつけて贈った歌。秋萩の下葉が移ろうのを見なかったならば、私が忘れ去られたあなたの心、その移り変わってしまったことを、どうして分かることができようか。萩の下葉の黄葉に寄せて、変心を恨

8) 秋山 虔、前の本、p 484
9) 広平親王:村上天皇第一皇子、母は大納言藤原元方女更衣元子、天暦4年～天禄2年(971)22歳で没

む内容である。

(10)「侘ぶ」

山口明穂10)によれば、「侘ぶ」は、共にいたい相手から離れていなければならないという、満たされぬ状態のままつらい思いをしている心の動きをいう。その際、つらい思いをもたらす相手は、たとえば、『万葉集』の「塵泥の数にもあらぬ我故に思ひ侘ぶらむ妹がかなしさ」(十五・中臣宅守・3727)のように、夫婦、恋人など異性の相手の場合が多いが、異性の相手と限るわけではない。また、古今の「春の日の光にあたる我なれどかしらの雪となるぞわびしき」(春上・文屋康秀・8)の用例が見られる。というのは、万葉の限られた例数から当時の用法を判断し、それと比較することで平安時代になって変化が生じたと考えるべきと指摘する。すなわち、万葉では、頼るべき相手の不在から生じるつらさということで考えられたが、平安時代のものも、捉えるのである。頼る相手を失い、あるいは、持たず、そのための恵まれない状況に置かれたことから生じる身のつらい思いを述べるものである。

題知らず
若草にとゞめもあへぬ駒よりもなつけわびぬる人の心か
(読人不知・巻十四・恋四・903)

「若草」は馬が好んで食用するもの。とゞめもあへぬ駒の表現は一般的に荒馬を指すのである。「なつけわびぬる」とはなつかせるのに難渋する。これは、『平中物語』三十三段に「春の野に荒れて捕まられぬ駒よりも君が心ぞなつけわびぬる」の例えが見られる。現代語訳としては、若草で留めることもできない荒馬よりも、一層なつかせることができないで困り果てている、つれないあの人の心です。荒馬に寄せて、冷淡な相手を嘆く。特に、荒馬は『蜻蛉日記』上に「甲斐の国速見の御牧にあるる馬をいかでか人はかけ留めむと思ふものから」にも見られる。

(11)「樵る」

「こる」には色々あるが、取り敢えず「樵る」から見てみると、木を切る、伐採する意である。早く万葉からその用例が見られるが、「木樵り来て筏に作り」(十三・3232)又、「凝る」は凝固する例として「凝当と申し侍るは、底に凝りたるを捨つるにや候ふらむ」(徒然草・158)即ち、応当と申すのは、底に固まっている(酒)を捨てることだろうかの用例である。一方、氷になる、凍るの意で使われる。万葉の「岩床と川の水凝り寒き夜を憩ふこと

10) 秋山 虔、前の本、p 487

なく」(一・79)平らな岩のように厚く川の水が凍ってそんな寒い夜も休むことなくの用例である。最後に「懲る」があって、失敗を反省して再びすまいと思う.懲りる。懲り懲りするの意である。この用例としては「もの隠しは懲りぬ」

題知らず
なげ木こる人入る山の斧の柄のほとほとしくもなりにける哉
(読人不知・巻十五・恋五・913)

なげ木には、「なげ木」に「嘆き」を掛ける。「なげ木」は、火に投げ入れて薪とする雑木。こるとは、「樵る」に、「凝る」を掛ける。「斧の柄の」は述異記などに伝える、いわゆる中国の晉の王質の「爛柯」の故事によるもので、山に木を樵りに行き、仙人の碁を打つのを夢中になって見ていたら、持っていた斧の柄が朽ちるほど時が経ってしまったという説話を踏まえている。ほとほとしくは殆しくも意である。すなわち、斧が危うく朽ちてしまいそうだに、自分が今にも死にそうだの意を重ねる。斧の音の擬音語「ホトホト」として、嘆きが凝って長い時が経った、という解釈も可能である。台三句までが、「ほとほとし」を導く序詞として働いている。現代語訳は、投げ木を樵る人が入る山の斧の柄が朽ちるように、私は嘆きが凝り集まって、今にも死にそうな思いをしていることです。思慕が叶わぬことの嘆きが歌全体に流れている。この用例としては『古今六帖』(二・三・斧の柄)に「吉野山投げ木凝るてふ斧の柄のほとほしくもありしほどかな」がある。

(12)「言ふ」

万葉から平安にかけての「言ふ」にめぐる当時の人々にどのような事柄と意識されたのかということを山口明穂は次のように述べている。すなわち、「言ふ」ことで現れるのが言葉なのである。「言(こと)」は事であり、「言ふ」ことは、そのまま言葉で表した事を現実世界に作り出したことになる。言葉にして表現したものは、現実にはない、あくまで言葉の上だけのことであっても、そう言ったことで現実になるという恐怖が生じる。言霊である。一方、当時の人たちにとって「言ふ」結果を作り出された事実は必ずしも満足のいくものではないことがあった。文学作品の中に枚挙にいとまのない「いふもおろかなり」などの表現は、言葉にすれば事態はいい加減のものになるということで、ある意味では事態を誇張するときに安易に使われた嫌いとはいえないが、しかし、言葉で表しうる姿は自分が意図したものには到底及ばないものだという表現者の苦しい発言であったに違いない。当時の人たちには、言葉で言い表される内容に限界のあることは十分に考えられていたのである。「いかにしていかに知らせむともかくもいはばなべての言の葉ぞかし」(拾遺愚草・藤原定家)は恋の歌であるが、自分の思いを相手に伝えることがどうしてもできない。言葉で言い表そうとすれば、それは通りいっぺんの言葉になり、自分の内心はそんな

言葉では表せないのだ、というため息にも似た表現である。このように言葉の表せるものには限界がある。しかし、逆に言わない限りは人の心は理解できず、心が通うものではない。不十分であったも言わない限りは分からない。11)

もの言ひ侍ける女の後につれなく侍て、さらに逢はず侍ければ
あはれとも言ふべき人は思ほえで身のいたづらに成ぬべき哉
（一條攝政・巻十五・戀五・950）

もの言ひ侍ける女の後につれなく侍て、さらに逢はず侍ければとの詞書の題意は語らっていた女性が、その後冷淡になって、少しも逢わなくなってしまったのでの意で、『一条摂政御集』に「言ひ交しけるほどの人は、豊蔭に異ならぬ女なりけれど、年月を経て返り事をせざりければ、負けじと思ひて言ひける」とある。大意は（私の死を）悲しいと言ってくれるような人は思い当たらないで、私は、（あなたに思いこがれながら）むなしく死んでしまうことだろうよ。あはれとも言ふべき人は　：　自分に対して、同情共感してくれそうな人。当然そう言ってくれるはずの人が、詞書によると、自分を捨てて去った今、他に思い当たらないのである。この解にすると、歌の「人」とは相手の女以外の一般の人ということになる。身のいたづらに成ぬべき哉　：　身がむなしくなる。死ぬ。片恋のために思い死にに死んでしまうというのである。『元真集』には、「恋ひわびて身のいたづらになりぬとも忘るな我によりてとならば」とある。この歌は百人一首(四五番歌)にも収められている名歌で、つれない相手に憐憫の情を求め、切実に訴えかけたものである。現代語訳にも先ず、次のように三つに分けられる。

壱。たとえ恋死したとしても、「ああ、かわいそうだ」と言ってくれそうな人は、誰一人として思い浮かぶことはなくて、私の身はむなしく死んでしまいそうなことです。

弐。（私の死を）悲しいと言ってくれるような人は思い当たらないで、私は、（あなたに思いこがれながら）むなしく死んでしまうことだろうよ。

参。私のために「ああ」と嘆いてくれるはずの人はあるとも思わないで、私の命は、駄目になってしまうことですとの解釈である。

一方、池田弥三朗によると、先ずこの歌の作者は藤原伊尹(謙徳公とも言われる)で、円融天皇の時の摂政太政大臣である。こういう歌から実在の作者の履歴を引き出してくることは危険だと言う。というのは、絵に「絵そらごと」があるように、歌には、「歌虚言」がある。恋のアワレを知ることは大和魂を、身につけることで、そのためには、大和歌を作らなければならなかったとのことである。和魂漢才の和魂の育成のために、歌を詠み、歌を作るのだから、その実効を考えに入れないと、とんだ謙徳公の虚像ができ上がると言っている。

11) 秋山　虔、前の本、p 50

題知らず
さもこそは逢ひ見むことのかたからめ忘れずとだに言ふ人のなき
(伊勢・巻十五・戀五・951)

語釈のところで、「さもこそは」とはいかにもそのとおりに、まさにそうでの意である。確かにそのように逢い見ることは難しいかも知れないけれども、せめて忘れることはないとだけでも、言って寄越す人もいないことです。逢わなくても、消息ぐらいは、と願うとの切実な感情が垣間見られる。

(13)「眺む」

小嶋菜温子[12]によれば、一般に「ながむ」とは、物思いに更けながら、ある一点を戸外などをぼんやりと見遣ることとされる。ある一点を見遣るというように対象が限定される場合には、しばらくの間、というように時間が引き延ばされ、逆に戸外などを見遣る場合には、たとえその時間が限られているとしても対象は漠然としている。「見る」というあり方のうち、時間的には長く、空間的には広いという特殊なあり方をいう。これは「見る」とは違って、いわば見て見ない状態であることといえそうである。したがって、殆んど自分の心を見るという状態に近づくのであろう。それが故、①長い間ぼんやり見ている、②ぼんやりと見渡す、③物思いにふけりつつ見ている、などの意に解されるのだと思われる。鈴木日出男は次のように指摘している。「眺め」の「なが」は「長」、「め」は「目」で長く見ている意であると言うのである。長いこと、はっきりした対象もなく、ぼんやり視線を投げかけている状態である。その原義から、①ぼんやり長い間見ること、②物思いに更けること、③遠くを見渡すこと、などの意が派生する。このような「眺め」は、『万葉集』など上代文献にはその語例がほとんどなく、平安時代の和歌で頻用され、しかもその多くは①と②、①と③などのように複合的なニュアンスで用いられた。

円融院御時、少将更衣のもとに遣はしける
限なき思ひの空に満ちぬればいくその煙雲となるらん
(円融院・巻十五・恋五・971)

円融院御時、少将更衣のもとに遣はしけるとは、円融天皇の御代、帝が少将更衣のもとに贈った歌で、思ひは「火」を掛けている。いくその場合はどれくらいの意を指摘する。同拾遺集の八八一番の「浅猿や木の下蔭の岩清水いくその人の影を見つらん」の用例が見える。「木の下蔭の岩清水」は木蔭の岩間から湧き出ている清水。夏には涼しさを求めて、人が集まる。多情な人の比喩。歌意は呆れ果てたことです。木の下の蔭にあ

12) 秋山 虔、前の本、p 309

る岩清水のように、いったいどれほど多くの人の姿を、水面に映る影としてみたことでしょうか。この歌は正保版本『金葉集』(恋下)にも重出している。歌全体に多情な恋人を恨んでいる。雲となるらんは思いの火の煙が雲になったとする。この用例は『後撰集』(恋六)の藤原朝頼の「富士の嶺をよそにぞ聞きし今は我が思ひに燃ゆる煙なりけり」がある。限りない思いの火の煙だから、どれほど多くの雲になったことでしょうか、と言いかけたものである。現代語訳は限りない思いの火が空に満ちているので、どれほど多くの煙が、雲となることでしょう。

御返し

空に満つ思ひの煙雲ならばながむる人の目にぞ見えまし

(少將更衣・巻十五・戀五・972)

語釈に入って、思ひの煙とは、思いの火の煙を指す、また、ながむるの場合は物思いをする意に、空を眺める意を掛けている。現代語訳としては、空に満ちた思いの煙が雲であるならば、物思いに耽りながら空を眺める人の目に見えるであろうに。前歌の反歌で、雲ならば見えるはずなのに見えないのは、帝の言葉は不実で、思いの火など燃やしていないからだとする。

(14)「誓ふ」

忘らるゝ身をば思はず誓ひてし人の命の惜しくもある哉

(右近[13]・巻十三・恋四・853)

をば(連語)は「を」で受ける語を、特に取り立てて強調する。「誓ひてし」は神に掛けて愛情を誓う。ここの人とは「君」というところを婉曲に言ったもの。忘れ去られる私自身のことは、別に何とも思わない。神掛けて愛情を誓ったお方の命が、神の怒りに触れて失われるのではないかと、惜しく思われることだ。(岩)このように思い忘れられる身になるなどは思いもせずに愛を誓いましたが、神かけてお誓いになったお人は、罪を受けて命を落とすようなことになったら、お気の毒ですこと。(三)(相手に心から同情する誠心純愛なのか、相手に皮肉を言って揶揄する社交儀礼なのか、解釈が分かれる)。百人一首に収められる名歌(百人一首三八)、永遠に変わらない愛を神掛けて約束し、もしその誓いを破ったら、罪として命をとられても言い、といった類の誓いのことばを並べたてて求愛した相手が、ごろりと心変わりしたので、詠んで贈った作である。[14]

---

13) 右近: 藤原氏、右近命婦ともいう。生没年未詳。歌人藤原季縄の娘。平安時代中期の女流歌人。

14) 『大和物語』(八十三、四段) (小学館、1998、pp.308～309)

KOREA MARITIME UNIVERSITY 1945 한국해양대학교

（15）「聞く」

音・声を耳で感じ取る、即ち何かを聞いて知る又、聞いてそうだと思うことである。「この歌どもを、少しよろしと聞きて」（土佐日記・一月十八日）がこの用例で、『伊勢物語』の場合は言う通りに従う、聞き入れるの意として「女は子の男を思ひつつ、親の合わすれども聞かなでなむありける」（二十三）のように、女はこの男を（夫）にと思い続け、親が（他の男）と夫婦にさせようとしても聞き入れないでいたとの用例である。

音に聞く人に心をつくばねのみねど恋しき君にもある哉
（読人不知・巻十一・恋一・627）

うわさにばかり聞くに思いを掛けて、筑波嶺の峰ではないが、逢い見たこともないけれども恋しく思われるあなたである。

（16）「定む」

下二段動詞「さだむ」の連用形の名詞化とした言葉が「定め」でその語義は、① 何かを決定したり優劣などを判定したりすること、またその決定されたことや判定の結果、②一定の法則や規則性、安定性、確かさ、の二つに大きく分けられると藤原克己[15]はいう。特に、②の意味の「定め」は、もっぱら打ち消しの語を伴って用いられるもので、「神無月ふりみふらずみ定めなき時雨ぞ冬のはじめまりける」（後撰集・冬・四四五）や、「定めなき風にしたがふ浮雲のあはれゆくへも知らぬ恋かな」（後撰集・恋五・土御門内大臣・九九二）のように自然現象に用いられた例も見られる。また、「大殿には、かくのみ定めなき御心を心づきなしと思せど」（源氏・葵）のように、不実な心に用いられた例もあるが、「世」ないし「身」について無情や存在の不安を表わした例が圧倒的に多い。定めなき世（身）といった成句は、『古今集』の「秋風にあへず散りぬるもみぢ葉のゆくへ定めぬ我ぞかなしき」（秋下・二八六）や「風の上にあり定めぬ塵の身はゆくへも知らずなりぬべらなり」（雑下・九八九）などを先蹤として定着したものと考えられる。つまり、世の中の無常さを指しているのがむしろ一般的であると氏は言っている。

いづ方によるとかは見む青柳のいと定めなき人の心を
（読人不知・巻十三・恋三・815）

「いづ方」は不定称で①どのほう、どこ②どれ ③どなたなど、「よる」は「寄る」に、「縒る」を掛ける。これは「糸」の縁語「かは」は「か」・「は」はともに係助詞で疑問を表わす。

15）秋山 虔、前の本、p 195

KOREA MARITIME UNIVERSITY

つまり、「か」の意。「見む」は見(見る・上一・未然形) + む(推量・意志 助動詞)、「青柳のいと」は「ヤナギ」の細枝を糸にたとえた語。柳が風になびくのを、「糸」に寄せて詠んだもの。「青柳の」は「糸」に掛けて、副詞の「いと」を導く枕詞的な用法である。「定めなき人」は多情な相手を指している。いったい誰のもとに寄ると見ようか。青柳の糸を縒るというが、まったく定まるところのない、あの人の心を。多情な相手を慨嘆する。

(17) 「なり」

「助動詞ナリ型」これは、格助詞「に」にラ変動詞「あり」の付いた「にあり」が変化したのは、ごく文法的なことである。その接続としては体言や体言に相当する語句、活用語の連体形に付く。もっと具体的に探っていくと、① 断定の意を表わしている。「竹取物語・かぐや姫の昇天」の「おのが身はこの国の人にもあらず、月の都の人なり」があり、「古今集・仮名序」に「強からぬは、女の歌なればなるべし」、② 存在の意を表わす。同「竹取物語・かぐや姫の昇天」に「壷なる御薬奉れ」、また ③ 近世での連体形の用法として使われる。たとえば、人名・資格の意を表わすのである。「信濃の俳諧寺一茶なる者の草稿にして」(一茶・おらが春・跋)などの例が見られる。

遠き所に思ふ人を置き侍て
雲井なる人を遥に思ふには我が心さへ空にこそなれ
(源経基・巻十五・恋五・909)

雲井なる人とは、詞書の「遠き所」、「雲井」は「雲居」で、雲の佇む所の意。「空にこそなれ」は「空」は、上の空の意で、「雲居」の縁語として働いている。現代語訳は雲の居る遠くに住む人を遥か彼方から思い遣る時は、私の心までが上の空になってしまうことです。すなわち、遠くに離れている人への思慕を表わしている歌である。

2-1-2 B歌群における「～人」

(1) 「恋し」

後藤祥子[16)]は文芸発生の一主因とされ、特に和歌の世界では、四季と恋が二大主題であることは確かである。すなわち、『万葉集』の「相聞」、勅撰集の「恋」部がこれに当たると言っている。『万葉集』では恋に「孤悲」の字をあてるなど、現代人と変わらない恋の悲哀・孤独を意識していたと思われるが、部立を「恋」と名付けるまでには概念が確立していなかった。「恋」部を立てたのは『古今集』であるが、その直前に成った『新撰万葉集』もその部立を「四時」「恋」「思(いわゆる述懐)」としたのは意味深いことであ

16) 秋山 虔 <編>、前の本、p.178

る。王朝時代の恋愛を文芸的規範から眺めると、そこには整然とした時間的流れが意識されている。求愛を受けた女性の初期の対応は相手の真意を疑い、はぐらかし、挑発する「いなし」の詠法を取る。たとえば、在原業平の歌(四七六)「見ずも有らず見もせぬ人の恋しくはあやなく今日やながめ暮らさむ」に対して、その反歌として「知る知らぬ何かあやなく分きて言わむ思ひのみこそしるべかりけれ」との段階である。恋二では月日を経ていやましに増さる恋心を、「頼めつつ逢はで年経るいつはりにこりぬ心を人は知らなむ」(凡河内躬恒・六一四)などのように、恋三では「行きて逢はぬ」「浮名立つ」「妨げらるる」「初めて逢ふ」「後期」「人目を忍ぶ」など初会前後の諸相を「有りあけのつれなく見えし別れより暁ばかり憂きものはなし」(壬生忠岑・六二五)、恋四では「逢ひて後増さる」「衣を隔つ」「心変りを戒む」「多情を恨む」「飽く・移ろふ」「忘る」など逢って後の変転を「頼め来し言の葉今は返してむ我身古るれば置き所なし」(因香・七三六)のように指摘している。恋五では「去年の恋」「失恋」「厭はる」「偲ぶ」「待つ」「忘らる」など恋の終末的諸相を「忘らるる身を宇治橋の中絶へて人も通はぬ年ぞ経にける」(八二五)のように歌っている。こうした恋の経過による主題分類は、院政期の『堀川百首』、平安末期の『六百番歌合』においてそれぞれ十題あるいは二十五題に秩序だてられ、一つの典型をなしているようになった。初会までの、いわゆる恋愛の前段階では、恋うのはもっぱら男の側であり、女はひたすら「いなす」が、後朝以後、男は勝者となり、女は嘆き、待ち、恨むなど立場が逆転する。この型すなわち男女の明快な役割分担は、康和四年(一一〇二)五月の『堀川院艶書合』の応酬に明らかである。

夢よりぞ恋しき人を見初めつる今はあはする人もあらなん
(読人不知・巻十一・恋一・630)

ようやく夢によって、かねがねうわさんみ聞いて恋しく思っていた人を見初めてしまった。今度は、夢合わせではないが、逢わせてくれる人もいてほしいものである。

夢よゆめ恋しき人に逢ひ見すなさめての後にわびしかりけり
(読人不知・巻十二・恋二・709)

夢よ、決して恋しい人を逢い見せるな。覚めてしまってからの後には、がっかりしてしまうから。現実で叶えられぬ恋を、夢の中での逢瀬で満たそうとするのかで、一般的な発想であるが、この歌では覚醒後の落胆を危惧してそれを避けようとしている。

いかならん折節にかは呉竹の夜は恋しき人に逢ひ見む
(読人不知・巻十三・恋三・805)

いったいどのような折に、夜、恋しい人に逢い見ることができようか。前歌に対応して、逢瀬の期待を自問している。

伊香保のや伊香保17)の沼のいかにして<u>恋しき人</u>を今一目見む。
(よみ人知らず・巻十三・戀四・853)

「伊香保のや伊香保の沼のは上野(こうづけ)、同語を重ねて、律調的な効果をもたらす。同音反復によって、「いかにして」を導く序詞。「伊香保」のばあいは、今の群馬県群馬郡の地名である。古くから温泉地として知られる。「伊香保のや」の「や(間投助詞)」は詠嘆の意を添えるのに用いられる。「や」が付いて調子をとっている。いかにして　：①どのようにして　②何とかしての意である。伊香保の沼、その「いか」というように、「いかにして」、どうにかして恋しい人に、もう一目逢いたいものだ。愛する人との再会を切望する。ここで伊香保のことをみてみると、近代文学との関わりも深い伊香保は、すでに『万葉集』巻十四に、

「伊香保ろに天雲いつぎかぬまづく人とおたはふいざ寢しめとら」(万葉集・3428)
「かみつけの伊香保の沼に植ゑこなぎかく恋ひむとや種求めけむ」(万葉集・3434)
「伊香保嶺に神な鳴りそねわが上には故はなけども児らによりてぞ」(万葉集・3440)
「伊香保風吹く日吹かぬ日ありといへど吾が恋のみし時なかりけり」(万葉集・3441)
「かみつけの伊香保の嶺ろに降ろ雪の行き過ぎかてぬ妹が家のあたり」(万葉集・3442)

等、「伊香保の沼（榛名湖）」「伊香保嶺（榛名山）」などの形をも含めて、「上野国歌」二十二首のうち八首にその地名が見えており、群馬の最も代表的な歌枕であったかの観がある。そしてそれが、「風」「神（雷）」といった、現在でも群馬の風物の典型とされているものと取り合わせられているのが興味深い。だが、平安時代に入って、伊香保詠は一変してしまったようである。

「呉竹の世々のふることなかりせば伊香保の沼のいかにして思ふ心をのばへまし」
(古今・1003・忠岑)
「伊香保のや伊香保の沼のいかにして恋しき人を今一目見む」(拾遺集・859・詠人不知)

17)『古今和歌集』・雑躰（小学館、1998、p 382)
古歌に加へて奉れる長歌　壬生忠岑
1003 呉竹のよよの古言なかりせば<u>いかほの沼</u>のいかにして思ふ心を述ばへまし
〈現代語訳〉古歌に添えて奉った長歌の詞書で、もしも世々に伝わってきた歌と言うものがありませんでしたら、私どもはどうやって心に思うことを申し述べることができましたことでしょうかの歌意である。

「かくれなく逢はずなりなばみちのくの伊香保の沼の我いかにせん（古今和歌六帖・1685）
「かんつけの伊香保の沼に植ゑしなぎかく恋ひんとや種もまきけん」（古今和歌六帖・3867）

平安時代中期の文献に見える伊香保詠は上の如くだが、数量の減少もさりながら、その質的変容に注目せねばなるまい。これらの例における伊香保は、『万葉集』と重複する「かんつけの」詠を除けば、全く実体としての姿を留めていない。「いかにして」「いかんせん」を同音で導く序詞的役割を果たすのみなのである。院政期に入って、

「東路の伊香保の沼のかきつばた袖のつまより色ことに見ゆ」（堀河百首・源顕仲）

の詠もあるが、概して言えば、王朝歌人達にとって伊香保は疎遠であったと認めざるを得ないであろう。

鎌倉時代になり、順徳院内裏歌壇で行われた「内裏名所百首」において、伊香保沼は夏題の一つに選定された。その背景は明らかでないが、歌枕伊香保の沿革を辿る上で、一度に十二首もの詠を生み出したこの百首歌の意義が極めて大きい事は疑いない。

「真薦生ふる伊香保の沼のいかばかり波越えぬらん五月雨の頃」
（内裏名所百首・順徳院）
「こなぎ植ゑし伊香保の沼のあやめ草長きほどをば誰もとめけん」
（内裏名所百首・行意）
「から衣かくる伊香保の沼水に今日は玉ぬくあやめをぞ引く」
（内裏名所百首・定家）
「影くらき伊香保の沼は夏草の露のみぎはに月ぞやどれる」
（内裏名所百首・俊成卿女）
「思ふことあやめの草の長き根に伊香保の沼のいかで残らん」
（内裏名所百首・兵衛内侍）
「五月雨に伊香保の沼のあやめ草今日はいつかと誰か引くらん」
（内裏名所百首・家隆）
「五月雨に伊香保の沼のあやめ草刈る人なみにくちやはてなん」
（内裏名所百首・知家）
「おりたちて引く手に夏はなぎの葉の伊香保の沼のいかがすずしき」
（内裏名所百首・範宗）

平安時代に確立した、「いか」を導く序詞的用法はここにも少なからず見えるが、実体を伴わないレトリックのみのそれではなく、実体そのものをも兼ねた、いわゆる有心序となっている。それは、詠法の変化と見るより、題意によってもたらされた必然的な結果と考

えるべきであろう。また、取り合わせられた景物に注目すると、「なぎ」「こなぎ」との結合に万葉歌との脈絡が辛うじて窺われるものの、「真薦」「五月雨」「あやめ草」等、万葉歌に見えなかった素材との結合を獲得しつつあるかの様相を呈している。だがそれは、伊香保のイメージの変化ではなく、夏題としての制約を受けながら何れの沼とも取り合わせられそうな素材と結合したに過ぎない、言わば伊香保の没個性化ではないだろうか。だが同時に、この百首歌が歌人達の歌枕伊香保の記憶を喚起させたであろう事をも評価せねばなるまい。この後に伊香保詠が頻出する、といった事態には至らなかったが、例えば「新撰和歌六帖」の沼題で五人の出詠者のうち二人が伊香保沼を詠み、また、

「伊香保風吹く日吹かぬ日まじらはばなど我が袖のほす時のなき」
（宝治百首・定嗣）
「くちなしにさえたる雲のかかれるは伊香保の嶺ろに雪ぞ降るらし」
（夫木抄・７２６１・顕朝）

といった、『万葉集』の歌枕である事を思い起こしたかのような口吻を示す和歌もよまれるようになったのである。

涙河のどかにだにも流れ南恋しき人の影や見ゆると
（よみ人知らず・巻十三・恋四・875）

「涙河」とは涙が多く流れるのを川にたとえていう語。流れ出る涙を川として、風景に目立てたもの。「だにも」は、さえも、せめて、だけでもの意である。流れ南とは、「泣かれ」を響かすか。「影や」の「や」は疑いを表す。言い切りに連体形を要求する。見ゆるは見ゆ(下二)の連体形・見えるは、現れる。見せる。嫁ぐなどの意がある。切れない恋の思いの涙が溢れて、川になって、流れ出す、涙川は、せめてのどかに流れてほしいものだ、ひょっとして恋い慕う人の姿が、水面に影になって、映り見えるかと。恋い慕って涙が流れ出るのを、せめて静まれと願ったものだがのもどかしさが流れている。

(2)「つれなし」

池田節子[18]は「つれなし」が「連れ無し」で、関連がない、の意が原意で、それが一語化した形容詞という。『万葉集』には、「つれもなし」の用例が十例、「つれなし」は一例が見られる。そのうち、五例は、「つれもなき真弓の岡に」(二・人麿・一六七)のように地名を形容し、何の縁もない、の意で、原意に近づいている。それ以外にも、無関心である、の意も適当であるものなど、中古以後の「つれなし」とは意味の異なるものが多い。

18) 秋山　虔 <編>、前の本、p.291

KOREA MARITIME UNIVERSITY

「つれなし」は、心の中で思っていることを表情に出さない、あるいは、他からの働き掛けに対して反応を示さず平然としている、といった、対象の客観的な様子をいうのが基本的な意味である。素知らぬ顔である、然り気無い、平気なようだ、変化が無い、などと現代訳される。和歌では、恋の相手の薄情さを表現することが多いが、散文では、平然としているの意で用いられることの方が多い。

音にのみ聞きつる恋を人知れずつれなき人にならひぬる哉
(読人不知・巻十一・恋一・641)

耳で聞くばかり実感していなかった恋というもののつらさを、無情な人によって、ひそかに思い知ったことである。

(3)「つらし」

本来は、①相手の仕打ちの酷い状態や、それをひどいと避難する気持を表わすのである。薄情、思いやりがないといった気持で「いとはつらく見ゆれど、志はせむとす」(土佐・二月一六日)、②現代語の「つらし」は、苦痛に感じるの意で用いられるが、当時にもやはり「恨めしい」「つらい」の意で、「命長さのいとつらう思ひ給へ知らるるに」(源氏・桐壷)のように苦痛に思われる例も見られる。

題知らず
人知れぬ心の内を見せたらば今までつらき人はあらじな
(読人不知・巻十一・恋一・672)

心中に秘めた私の深い恋の思いを見せたなら、いくら何でも今に到るまで薄情な態度をとる人はあるまいだろうな。

題知らず
つらきをも思知るやは我がためにつらき人しも我を恨むる
(読人不知・巻十五・恋五・947)

語釈は、「つらき人しも」の場合、上の「つらし」は苦悩の意だが、この「つらし」は無情・冷淡な意である。相手が無情と恨み言を言って寄越したのに対して自分の内心の苦悩を、相手は理解していないということを指す。現代語訳は、あの人は私の悩みを、本当に分かっているのだろうか、いや分かってはいまい。私に対してつれないあの人が、かえって私を恨んでいることです。

（4）「うつくし」

山口仲美[19]によると、奈良時代から平安時代にかけて、「うつくし」は、幼い者・弱い者を「かわいい」「いとしい」と思う気持を表わした。現在の「美しい」の意味とは異なっているということがわかる。「父母を見れば尊し妻子見ればめぐしうつくし世の中はかくぞことはり」（万葉・五・山上億良・八〇〇）のように、「うつくし」は夫が妻や子を「いとしい」と思う気持である。また、「橘の古婆の放髪が思ふなむ心愛しいで我は行かな」（同・十四・三四九六）は、男が少女を「かわしい」と思う気持を表わしている。これらは、奈良時代の用例だが、平安時代になっても、こうした意味の「うつくし」の例は見られる。「うつくしと思ひし妹を夢に見て起きてさぐるになきぞかなしき」（拾遺集・哀傷・一三〇二）のように、とりわけ和歌の世界では、ほとんど「いとしい」「かわいい」の意味使われる。

題知らず
朝寝髪我はけづらじうつくしき人の手枕触れてし物を
（人麿[20]・巻十三・恋四・833）

朝寝髪は朝起きたままの乱れ髪。朝起きの梳かしていない髪、けづらじはくしけずるまい。梳かすまい。けづる　［梳る］　はくしで髪をすく。くしけずる、うつくしき人は愛しい人。相手の男性。手枕　：　腕を枕にすること。てまくら。男女が共寝をして相手を腕に枕させることを言う。「物を」はを（…から、…ので）の原因などを表わす。朝の寝起きの乱れ髪を、私は櫛でとかすようなことをすまい。愛する人の手枕が触れたのだから。朝起きの髪に共寝の余韻を求める[21]

（5）「苦し」

①心身に苦痛が感じられる、つらい、苦しいの意で使われる。『竹取物語』の「かぐや

19）秋山　虔 <編>、前の本、p.70

20）　人麿：柿本朝臣、生没年・家系等未詳、三十六歌仙の一人。和歌三神の一人とされることもある。

21）『和泉式部日記』一　平安期の女流日記文学（小学館、1998、p 54）
頼もしき人もなきなめりかしと心苦しくおぼして、今の間いかがとのたまはせたれば、御返り、
今朝の間に今は消ぬらむ夢ばかり寝ると見えつる手枕の袖
と聞こえたり。「忘れじ」と言ひつるを、をかしとおぼして、
夢ばかり涙にぬると見つらめど臥しぞわづらふ手枕の袖
現代語訳は、その朝、宮は、女には頼りになる男とていないようだと気の毒にお思いになって、「ただ今どうしておいでですか」と言っておよこしになったので、そのご返事、（今朝のうちにもう乾いてしまったでしょう。ほんのわずか仮寝で濡れたように見えた宮様の手枕の袖は）と申し上げた。「手枕の袖は忘れません」と言ったとおりで、おもしろいと思われて、（ほんのわずか涙に濡れたとお思いのようですが、私の手枕の袖はぬれて臥すに臥せないでいるですよ）

姫の生ひ立ち」に「翁心地悪しくくるしき時も、この子を見ればくるしきこともやみぬ」、②気をつかって苦しむ、心配であるの意である。「人や見つけむとくるしきを、女はさも思ひたらず」(源氏・紅葉賀)、③見苦しい、厭な感じである。「心のままならず作りなせるは、見る目もくるしくいとわびし」(徒然草・十)、④困難である。難しい。「とみにもえ干しやらず、起き居給へるもくるし」(源氏・東屋)、⑤(多く打ち消しを伴って)都合が悸い、差し支えがある。「その人ならばくるしかるまじ。入れ申せ」(平家・七・忠度都落)などの例えが見られる。

ねぬなはの<u>苦しかる覧人</u>よりも我ぞ益田のいけるかひなき
(読人不知・巻十四・恋四・894)

III. 結

以上『拾遺集』における「歌」部の「～人」に関して、若干の考察をしてみたが、それぞれA・B群における「人」の用例をもっと研究範囲を狭めて接近したところ、その中から特に歌の作者人間の「ジェンダー」という語が予め浮かび上がったことであろう。一応、「その歌の中の、主体としての性」といった意味で用いたいと思ったが、もちろん内容としては、特に平安時代の和歌に馴れている方々にとっては、月並な話かもしれないと思われるが、これらの歌は「男」の歌であろうか、それと「女」の歌であろうか。その一首の作者が女性の名である事を記憶しているならば、瞬時に躊躇なく「女の歌である」と答えるであろう。でも読み人知らずの如く一首の作者が男性であるか女性であるか、知識を尋ねたつもりはない。では、換言して自分に質問し直すと或歌は男の側で詠まれた歌であろうか、それとも女の側で詠まれた歌であろうか。今度は即座に答える可能性は少ないであろう。暫し躊躇した後で「女の立場で詠まれたもの」と答えるのではないかなと予測する。それではその根拠は何なのか。作者が女性だから、というのでは根拠にならない。仮に作者の性別が立場を決定するのであれば、そもそもこんな問題設定の仕方そのものがナンセンスではないだろうか。たとえば、夕方に来ないあの人を待つ、というのなら、明らかに女の立場であると断言し得る歌であるとも考えられる。「恋」の流れの典型として示した各段階の中で、恋の喜びが歌われやすそうなのは、「漸くにして念願通り逢瀬を果たす」という場面がある。手放しまでの歓喜とまでは言えないとしても、恋歌は念願が叶って逢瀬を果たした喜びが強く表出している例として挙げても良さそうに思われる。先に「和歌的抒情とはなり難い」と評した要素を含み持つ歌が、このように多少なりとも存在する事も確かである。極めて象徴的なのではないかと思うのである。逢瀬を遂げたこの瞬間に死を願う「今日を限りの命ともがな」のは、幸せの絶頂の中で死にたいとい

う子供っぽい感傷の故ではなく、「忘れじの行く末まではかたければ」、即ち愛情の持続に対して強烈な不信感を抱いているがためである。そしてその危惧が的中し、熱愛した二人の関係に秋風が吹き始めるのには、長い時間を要しない。といった離れ離れの予感を言外に漂わせた歌やすでに恋人の訪れが稀になりつつある事を明確に示している歌が列挙されており、上の例では、約束を反故にされ、来ぬ人を思うあまりに疑心暗鬼に捕われたかのような内容の歌が登場するのももう間もなくの事である。さて、念願の逢瀬を遂げたところで恋の歓喜は長続きしないのだ、という事を言いたいがために、逢瀬の歌の前後を具体的に辿ってみたわけであるが、今、一連のものとして辿った流れの中に看過し難い断絶が生じていた事にお気付きであろうか。容易に振り向いてはくれぬ相手に幾度も思いのたけを訴え、漸くにして逢瀬を果たして喜ぶのは、当時の男女関係のあり方を踏まえれば、男の側の恋情であり、夕暮に訪れがない事への不安に慄き、離れ離れを嘆くのは女の側の恋情である。即ち、逢瀬の場面を境にして、断じて「作者」ではない歌の主体の性がするりと入れ替わってしまっているのである。今は取り敢えず逢瀬の前後のみを確認してみたわけであるが、その確認を踏まえてもう一度恋歌全体の流れを見直してみると、実はその流れ自体が全く同様の構造を持っている事に気付かされるのではないであろうか。仄見た相手に密かに恋心を抱き始めるという事は、たとえ当時であっても、男女何れにも起こり得る事である。現実的には、その思いはどちらかの性に限定されるわけではないであろう。しかし、その思いが募りに募って、自分の胸の内だけに留めかね、遂に相手に告白する事になる展開を先取りするなら、主として男の側の立場を想定していると考えるのが穏当だろう。そして恋の終焉も、現実的には男女何れの側にも起こり得るが、歌に詠まれる典型である、嘗ての恋人の訪れを回想しつつ夕暮に立ち尽くす後姿は、女のものでしかあり得ない。要点を繰り返すが、個別にはいくらでも例外が見出せるとしても、恋歌の全体的な大まかな流れとしては、前半は男の抒情であり、後半は女の抒情である、というわけである。つまりジェンダーという観点からすればそこには大きな断層が横たわっているのであるが、余程理詰めで考えていかない限りその断層が意識されないのは、前半後半を問わず恋歌全体に、一貫したある種の通奏低音が流れている所為であろう。先に、恋の喜びは和歌的抒情とはなり難いと述べたが、逆に和歌的抒情となりやすいものは、対比的に言えば、恋の悲しみである。その恋の悲しみが自ずとジェンダーの交替を要請しているのである。何故なら、当時の通い婚的恋愛形態においては、逢瀬を境にして恋の弱者は男から女へと転換するわけであるから。恋部の歌によって、恋の悲しみが恋心の萌芽から恋の終焉を辿る形で表現されているという事である。当然ながらその作者は現実では男性か女性かのどちらかに属する筈であるが、その作者が恋部の連作を詠む場合には、ジェンダーの使い分けを半ば強制される事になるわけである。或いは連作でなくても、例えば歌会や歌合で出

された題が自ずとジェンダーを決定してしまう場合もあるであろう。男性歌人も女流歌人も、本来的に具有する性に拘わらずそのジェンダーになりきって歌を詠まねばならない。自身の現実の恋愛の場面で和歌を詠む時、それが代作でもない限り、彼等が生来の性に拘束されていた事は疑いようもない。しかし、題詠的な恋歌を詠む場合には、歌人達は直ちに「両性具有者」に変貌するのである。題が要求する局面に適応すべく、彼らは変幻自在にジェンダーを使い分けるのである。いや、そもそも彼等は自覚的に「使い分ける」と言える程に、果たして歌の中での男女の峻別に対して厳格であったのかどうかということである。「両性具有」というよりかえって「無性」という評の方が相応しいのかなとも思われる。変容は忍恋という恋の最も初期段階を詠んだものである。作者が訴えたかったのは恋の悲しみや情念だった筈であり、ジェンダーは、それを表現するために選び取られたスタンスを現実的な約束事に当てはめた姿に過ぎないのではないであろうか。その姿を生々しく思い描く必要があるのかどうかということが三代集に於ける「～人」の考察からのもう一つの疑問である。

参考文献

小町谷照彦 校注、日本古典文学大系 7『拾遺和歌集』、岩波書店、1990
風巻景次郎・小島吉雄、『山家集・金槐和歌集』日本古典文学大系 29、岩波書店、1981
風巻景次郎、風巻景次郎全集第五巻『和歌の伝統』、桜楓社、1980
手崎政男、『有心と幽玄』、笠間書院、1985
梅原 猛、『古典の発見』、講談社、1988
久保田 淳・北川忠彦、『中世の文学』、有斐閣、1985
寺田純子、『古典和歌論集』、笠間書院、1984
佐藤佐太郎、『斎藤茂吉研究』、日本図書センター、1990
和歌文学会、和歌文学講座第二巻『和歌史・歌論史』、1982
長谷川国雄、『日本の古典名著・総解説』、自由国民社、1979
久保田淳、『古典和歌必携』、学灯社、1985
ユリイカ 総特集『白洲正子』、青土社、1999
片桐洋一『古今和歌集の研究』、明治書院、1991
杉谷寿郎『後撰和歌集研究』、笠間書院、1991
丸谷才一、『百人一首』、河出書房新社、1983
古語例解辞典、小学館、1999
秋山虔、王朝語辞典、東京大学出版会、2000